

# 立ち尽くす男たち

## 埋もれる孤独

中

を出せなかった。

閉店後も孤独は続いた。

夕食の用意や洗濯をしながら、寂しさに襲われる。

「このままで終わるのか。」

もう働けないのか。もんとした日々を送っていたことし三月、東京都内の

「荒川区男性介護者の会」

(通称・オヤジの会)を知り、飛び込んだ。

「みんなの顔を見た瞬間、

やっとだな、これだなって思ったよ。それまで女性ばかりの介護者のついで打ち明けられなかった本音も出た。十一月上旬の集い。テーブルには打ち解けやすくするための酒。傍らに座る公子さんを気遣いながら

「今なら主夫と言える。仲間がいるから」と笑う。

つどのメインはことし三月に発足した「男性介護者と支援者の全国ネットワーク」の事務局長、津止正敏立命館大教授の講演。

「介護に直面した男たちは戸惑う。夫や息子に介護されると夢にも思わなかった女たちは相手を気遣う。その現場で、希望と絶望は瞬時に入れ替わる」。伊藤さんらは、言葉にわが身を重ねた。

介護殺人など死亡事件の加害者は、四分の三を男性が占める。在宅介護者は七割が女性。男性の犯行率は女性の七倍にのぼる計算だ。

「家事ができない。人に相談しない。そして地域社会に友人がいない」。男性介護者のサポート団体「となりのかいご」(神奈川県伊勢原市)の川内潤代表は理由を簡潔に指摘する。仕事のように目標を立て、日々の成果を求めるまじめな人ほど「後退の連続」(川内代表)の介護に戸惑い、行き詰まる。

名古屋市中で認知症介護者

を支援する黒川豊医師は「子育ての経験が少ない男性は、排せつのケアが高いハードルになっている」。三十年ほど前、男性介護者は全体の二割に満たなかった。現在はほぼ三割。すでに百万人を超えている。

連載にご意見をお寄せください。Eメールはshakai@tokyo-np.co.jp 手紙は〒100 8505 (住所不要) 東京新聞社会部。ファクス03 (3595) 6919



「男同士だからこそ、話せることもある」と語る伊藤金政さん(手前左)＝東京都荒川区で

介護社会 第1部

大産業医 (北九州市) 福岡市内の60歳以上の高齢者3000人を対象に、2002年から5年間の追跡調査を実施した。同居の家族が要介護状態の男性は、健康な家族と暮らす場合に比べ、死亡確率が1.9倍だった。女性にはほとんど差がなかった。同教室の松田晋哉教授は「介護力のない男性が、備えもなく介護に取り組まざるを得ない現状の危うさを示している」と指摘する。

メモ